

は「是れは先刻此所から逃げやうとしたから叩き潰しました、其れで一枚と言つたんで……」、煎餅の様だ、「成るほどこれは一枚だ……」其れを寄せてもまだ一人足りない「ハテ變なことがあるものだ」考へてゐると、馬場の脇手の大きな柏の立木、其の木蔭に聊か穴洞になつてゐる所がある、其れに隠れて居りましたところの中川津祐範、手鎗を持つて不審を打つて居る武庸の後ろの所へツツと廻つて來た、油斷を見計つて「エイッ」、と氣合諸共突出さうとする鎗、「ソーラ先生後ろへ廻つた〜、危ねいぞ」と云ふ聲、ヒョイツと後ろを振向く途端に突立てる本來電光の鎗先、體を換して暫らく合せて居りましたけれども、浪人劍士の頭領をしてゐるだけあつて、祐範もナカ〜の腕前、一往一來やつて居る内に、トウ〜安兵衛持つたるところの刀を巻取られた、シテヤツたりと突出す鎗先、ヒラリツと引つ外して置い

て、諸手を伸ばして突然千段巻の邊りをピツタリ押へ、手許へグイッと引いた、剛力の安兵衛、思はず知らず祐範鎗を取られ、刀の柄前に手を掛けるところを、奪ひ取つた件の鎗の鐵を返して置いて、ドーンと突かれた、何んぞ堪らうものでは御座いませぬ、ヨロ〜と踏跟くところを、復た一つ突いた、バツタリ後ろへ倒れる、起上らうとする所を上へ飛掛つて、耳の下のをブツ〜突通した、彼所は鰻の急所で御座います、鰻はかりぢやアない、人間だつて彼所は急所だ、憐れ無慘の最後、向ふに巻落された一刀を取上げ首を擧げる、都合十三人首が揃つた、活る人に言ふ如く涙ながらに、「御伯父上、御覽の通り十三疋の浪人討取りました、是れにて聊か御無念を御晴し下さるやう、南明幽靈頓生菩提、南無阿彌陀佛〜」と念佛を唱へて居りました。然る所へ此の事を町役人より町奉行へ訴へ出でましたに依つて、直ぐに町奉

行は下役を随へて検視の爲めに出張一ト先づ中山安兵衛は町奉行所へ引かれ
 ることになり、吟味の上、其の頃は武張つた時代ですから、果合は斬り
 得、斬られ損、却つて大勢の浪士を討つて押へ、仇討を致した段、奇特であ
 ると云ふので白銀二枚御褒美として下し置かれ、屍骸取片附を命せられる、
 中津川祐範を始めとして十三人の屍骸は取捨て、多くの門人が密々金を使つ
 て此の屍骸を取片附ることになつた。
 安兵衛は早速青山百人町松平左京様へ出まして、家老松平嘉太夫様に御目に
 掛り、伯父六左衛門が御立取を戴いた御禮を申述べ、家財をスツカリ取片附
 けをして、屍骸の葬りを致し、伯父に代つて御奉公を勤められたけれども、
 思ふ仔細があればとて御断りをして、靈岸島川口町へ戻り、相變らず赤鞆の
 安兵衛さんで、放浪生活を續けて居りました。

第二十回

中山安兵衛の市中の評判は益々高くなつて、秋元但馬守殿から二百石位で召
 抱へやうと言込んで来る、御断りをする、其の翌日は真田信濃守殿から三百
 石で召抱へやうと言つて来る、是れも断る、其の翌日は松平讃岐守から御
 召抱へに来るなど云ふやうな有様思ふ仔細があるから、御奉公はなり兼
 ると云つて、皆な是れを断つては相變らず酒を飲んで遊んで居ります。
 スルと御話は茲に二ツに岐れて、鐵砲洲の輕子橋、五萬三千石淺野内匠頭様
 の御家來、御留守居役を勤める堀部彌兵衛金丸、高田の馬場に仇討のあつた
 當日、御家内のお志保、娘お順、二人が維司ヶ谷の鬼子母神へ參詣に往て留
 守は彌兵衛金丸書齋にあつて、頻りに書見を致して居りましたが、「コレヨ、

「へー、御喚びになりましたか」「まだ家内は戻って来ぬナ」「左様で御座います」「大分歸りが遅いな」「左様で……エー今日はお歸りが遅くなりませう」「何故か」「エー、堀の内の御祖師様へ先きに御参詣をなさいまして、其れから雜司ヶ谷へ御詣りになる、斯う云ふことをちよつと伺ひまして御座ります」「其れにしてもモウ八ツ半ぢや、餘り歸りが遅いぢやないか」「左様で御座います、ちよいと其れぢやア途中まで御迎へにでも参りませう」「否、往くには及ばぬけれどもナ、大方何んだらう、假托けて芝居見物でもしてゐるんだらう、打遣つて置け」「何に御新造様、御嬢様にそんなとがあるもんぢやア御座いませぬ」。話しをして居る處へ立戻つて参りました御家内御娘子、「貴方唯今戻りました」「何所へ往きなすつたか」「堀の内の妙法寺から雜司ヶ谷へ参詣を致しました」「否、其れはお前が私に言譯といふものだらう、其れやア参詣もしたらうが、今時分に歸邸をするといふのは、大方何んだらう、葺屋町邊で芝居見物でもして居なすつたに違ひない、するも宜いが、佛詣りを口實に芝居なんぞを見物いたすと云ふは誠に怪しからぬ話、ウ、ム家中の誰彼の耳に入つたら、其方は宜いが、俺が不取締りと言はれなければならぬ、下々ぢやア何んだ、此の芝居なんといふものは、無筆の目學問なんぞと言つて、女子供などを能く見せに遣つたり何かする、あれは學問にも何ンにもならぬ、却つて不品行の媒介をするやうなもの、妙齡の娘を連れて其處所へ往くやつがあるか」「あの決して左様では御座いませぬ」「否、左様で無いことはない、其れに違ひない、以來少と氣を附けなさい」「恐入まして御座います、もうお言葉は御座いませぬか」「別に小言を云ふぢやア無い、以來の爲めに言つて聞かせる」「恐入りまして御座りますが、歸宅の遅くな

ら、其れやア参詣もしたらうが、今時分に歸邸をするといふのは、大方何んだらう、葺屋町邊で芝居見物でもして居なすつたに違ひない、するも宜いが、佛詣りを口實に芝居なんぞを見物いたすと云ふは誠に怪しからぬ話、ウ、ム家中の誰彼の耳に入つたら、其方は宜いが、俺が不取締りと言はれなければならぬ、下々ぢやア何んだ、此の芝居なんといふものは、無筆の目學問なんぞと言つて、女子供などを能く見せに遣つたり何かする、あれは學問にも何ンにもならぬ、却つて不品行の媒介をするやうなもの、妙齡の娘を連れて其處所へ往くやつがあるか」「あの決して左様では御座いませぬ」「否、左様で無いことはない、其れに違ひない、以來少と氣を附けなさい」「恐入まして御座います、もうお言葉は御座いませぬか」「別に小言を云ふぢやア無い、以來の爲めに言つて聞かせる」「恐入りまして御座りますが、歸宅の遅くな

りました次第を一通り申上げまするに依つて、ドウぞ御聽取りを願ひたう存じます、辯疏をさるなり、否、辯疏では御座いませぬ、維司ヶ谷の鬼子母神へ參詣を畢つて歸途、通り掛りました牛込高田の馬場、多くの人が雑踏を致しますので御座ります、ウム、何ンであるかと尋ねて見ますと、唯今果合があるといふことで、斯う申上げましたら、女だてらに其處所へ立寄りぬでも宜い、斯う思召も御座いませうけれども、私は兎に角、娘の順は是より良い夫を持たねばなりません、果合ひなどを見せて置きましたらば、是れも武家の家内たるもの、心得にもならうかと存じまして、其果合を見物いたして居りましたので、斯の通り遅くなりました。ハ、ア、何だ果合ひがあつた、其れを見てゐた爲めに歸へりが遅くなつた、然うか、其れなら何故早く言ひなさらぬ、武士の家内たるものが果合ひを見て歸りが遅くなつ

た、俺は決して小言を言ひませぬ、其れやア珍らしいことであつたな、俺が若い時分などは三日にあげず果合ひがあつた、此頃ちやア誠に此の武士の風儀が亂れて了つて、果合ひなどといふものは頓と聞いたことも見たこともない、フム、何れもなんだらう、其の果合ひをしたと云ふのは血氣壯年であつたらうな、果狀を附けましたのは血氣の若侍十有餘人、果狀を附けられました方は、六十餘の御老人一人で御座います、フム、其れは天と釣合が付かぬぢやないか、テ多くの者の爲めに其の老人は、手も無く立るに討たれたらう、左様で御座ります、御老人では御座いまするし、御討れ遊ばしまして御座いますけれども、其の老人もナカク腕前は優れて御いで、は御座います、欺し討ちになりました、フム、欺し討ちとは何ういふ次第か、お志保は菅野六左衛門が欺し討ちになつた頓末、忠僕定助が非業の最後、中山

安兵衛武庸が非凡の働きまで、高田の馬場にありし次第を事細かに物語りま
 した、彌兵衛金丸は是れを聞いて満面に喜色を湛へ「フ、ム、其の中山安兵
 衛と云ふ男はエライなア、之れこそ娘順の婿として、恥かしくない人物だ、
 シテ、定めし住所を尋ねたであらうナ」「仰せまでもなく、伺はうと存じて居
 る内に、公儀御役人が出張になりまして、其の仁の身邊を取巻き側へ寄り着
 くことが出来ませず、心ならず其の儘立戻りました」「何んと言はれる、住
 所を尋ねて来ない、コレ、何んで尋ねて来ないんだ」「伺はうと存じて居りま
 す處へ公儀の御役人が……」「公儀の役人が一人や二人居つたからとて尋ね
 られぬことはあるまい、若し尋ねられたら、此の仁には是々の物を貸與へて居
 るに依つて、住所を尋ねると言へば仔細はないのだ、毫碌婆ア、詰らん事を
 ベラ〜喋舌つても、肝腎な處を聞かなければ何ンにも成らぬ、彼方へ往ッ

てなさい……」「ハイ」「何んだ大層利巧さうに話をして、感心だと思つた
 ら矢ッ張り毫碌だ……、文助」「へい」「話を聞いたであらう」「残らず承は
 りました、豪い御仁で御座いますナ」「ウム、其の仁を娘の婿にするのだ」「へ
 い、左様で……モウ御定りになりましたので……」「黙れ、此の方で然ら思つ
 ても先方で何うだか分らんのだ、越後新發田の浪人中山安兵衛と姓名だけ分
 つて居る、住所が何處だか分らぬ、併し江戸市中を尋ねたら大概容子が知れ
 やう、今からでは仕方が無い、明早朝飯を食つて、腰辨當で江戸市中を高田
 の馬場で仇討を致した中山安兵衛といふ人物を尋ねる」「へい」「三日位尋ね
 たら大抵分るであらう」「左様で……」「三日掛つて尋ね當らぬ節は、其方の
 役目落度である、切腹申付ける」「へエー……」「何んて聲を出すんだ」「ア、
 驚きましたナ切腹とは……」「主人の吩咐を其方驚きましたといふ挨拶があ

るか」「へエ委細 畏りました。」
 若黨文助は膽を潰して、其の翌日から復讐をした中山安兵衛の所在を尋ねる、
 一日歩いたが分らない、二日目も足を棒のやうにして歸つて来た「文助」「へ
 ーイ」「何う致した」「サツパリ分りません」「何んで泣くのだ、エー、明一
 日経つと申付けた通り、切腹申付けるぞ」文助は頭を抱へて「へー、畏りました
 て御座います」サア斯うなると、愈々明日一日の生命だ、モ一其の晩は寝て
 も眠られない。
 翌日も相變らず七ツ起をして、文助は出掛けました。

第二十一回

仕官の望みを断つた安兵衛武庸、相も變らず酒を飲んぢやア、毎日ブラ

遊んで居る、今朝も昨夜の酒が持越して、大層寝過した、「ア、婆さんく」
 壁一重隣りが糊賣の婆さん、例のトンネルの所から「何んだい」「ドウも昨夜
 少し飲過して、今日は心持が悪くていかぬ、迎酒を一杯飲みたいと思ふ、
 表の酒屋へ往つて俺が然う言つたつて一升取つて来て呉れ」「現金かエ」「俺
 が然う言つたと云つて借りて来い」「其れやアいけないヨ、御前さんの使に往
 くと恥を被くから……」「何故」「何故つて、中山さんはお錢も持つて来て呉
 れないで、品物の小言を言ふ、錢が無けれやア上げないと言つて断わるよ」
 「穴倉屋の親方……」「其れやアいけない、穴倉屋くつて、穴倉屋の名前を
 借りては宜くない、彼家にやア始終厄介に成り勝で、いかぬと云ふのに……」
 「まア何しろ困つたナ……飲みたいナ……ア、是れく婆さんは是を典物して
 呉れ」「何んだねー、てんぶつていなア」「質品が有るんだ」「オヤく御前

さんの所に質品があるね、「ウン、まア此方へ入つて来て呉れ」、「左様から」、「グルッと大廻りに廻つて表を開けて入つて来た、「何んだね、質品は」、「エー、是れを一つ持つて往つて借りて呉れ」、「オヤ、何んだい其れは緋鹿子の扱帯ぢやアないか、斯ういふ男鰥の先生の所に珍らしい品だ、何うしたの安兵衛さん」、「ドウでも宜い、幾らかになる」、「幾らかにはなるが、出所が分らない物を質屋へ持つて往くと断わられる、貸しぢやア呉れないヨ、御前さん酔つぱらつた景氣でもつて、悪るい丁簡でも出して……」、「馬鹿ア言へ、如何に身貧するとも、道ならぬ事は致さぬ」、「其れなら確かな出所を言つて御覽ナ」、「嫌やだ」、「言はなきやア私も嫌やだ」、「ぢやア聞かしてやる、或る大家の娘がナ俺に惚れたと思へ」、「忌やだねー、朝つばらから惚氣なソを……」、「惚氣ぢやアない本當の事、所が人目があつて遇ふことが出来ない、復た遇ふまで

の左券にと俺の所へ送つて寄越した大事な物、けれども好きな酒にやア代へられぬ、質屋へ持つて往つて幾らか借りて来て呉れ、「本當かい」、「くどい奴だナ」、「ぢやア往つて来るヨ」と婆さんは扱帯を持つて出掛けて往つた、安兵衛は蒲團の中でモシ／＼してゐる所へ、「御頼申す／＼」、「何んだ」、「中山安兵衛殿御浪宅は御當家であらつしやいますか」、「ハ、ア又た来たナ……イヤ、此方を召抱やうといふ御使で御座らう、エー其れならば其れへ出て御挨拶するまでも無い、御歸り下さい、安兵衛は奉公いたすのは折角ながら御断り申す、「左様では御座らぬ、聊か御面會を致したく罷出でた、是非とも御目に懸りたし、ア、左様か御入り下さい……ア、其の戸は氣を付けて御開け下さるやう敷居が腐つてゐるから……然ら／＼ソーラ開きましたらう、ドウツ此方へ……」據る無く起上つて蒲團の上にヒタリツと着座する、入つて来る人物を見る

と六十三四でもあらう、人品の良い立派な御武家「早朝から罷出で甚だ失禮……御初に御意得申す、手前は鐵砲洲輕子橋淺野内匠頭家來留守居役を致す堀部彌兵衛金丸と申す者」、「イヤ、申後れて相濟まぬ、御尋ねに預りました中山安兵衛武庸、何等の御用あつて斯様な見苦しい所へ……」、「イヤ、今日伺ひましたのは餘の儀では御座らぬ、過日其許高田の馬場に於て伯父上の復讐をなされた、其の節見物の中より襷鉢巻を御貸し申した者が有るで御座らう、其れを御覺えであらうが」、「ア、如何にも時に取つての御心添へ辱けなく存じ推戴いて襷を掛け、鉢巻をなして當の相手十有餘人を討取りました、何うして其許それを御存じか」、「實は其扱帯を御用達申したは愚妻で……」、「エ、ツッ安兵衛膽を潰した、も少し早く来て呉れ、ば宜かつた、今糊賣婆に質屋へ持たして遣つて了つた、困つたことが出来たと思ひながら、「左様で御座つたか

知らぬこと、は申しながら存外失禮を致した、彼の節拜借いたした品は、彼の場で御戻し申すべきであつたが、公儀役人に取巻かれ、其の内に御姿を見失ひ、役所に引かれて一應取調べられ、直様歸宅後、品を檢めし所、別段疵は附けは致さぬが、聊か血を以て穢しましたに依つて、早速染抜に遣はしたが、何がサテ紺屋の明後日、唯今以て出来いたさぬ、出来次第手前より御屋敷へ御届申す、「否々、少々御待ち下さい、御貸し申した品を御催促に罷出でたのでは御座らぬ、話の所へ糊賣婆さんが歸つて来た、大きな聲で「先生々々……、彼の緋鹿子の扱帯はドウしても二朱ツきやア附かないヨ、全體質屋の番頭がネ因業過る、本場の緋鹿子だ一分位は附くだらうが、ドウしても其の上は貸さない、トウ、根負けして二朱借りて来た、そのお金で御酒を一升其れにネ、河田へ往つて御刺身を二人前……」、「シート、彼方に往つてろ

何をグツグツ……、「何んだネー、氣に入らなければや氣に入らないとお言ひ、ケンノミを喰はせなくつても宜い、……朝つばらから人を質屋の使に遣つて禮も言はないで、ケンツクを喰はせる奴があるかネ、だから御前のことを氣まぐれだと世間の人が言ふよ」言ひながら中を見ると立派な武士、氣まり悪る氣に其所へ入つて、「ぢやア此所へ御酒と御肴を……」、「何んだ御客様に御挨拶も無く、無禮な奴だ」婆さんはソコ〜に家へ歸つて例の孔から容子を見てゐると、堀部彌兵衛、さては苦し紛れに典物して酒肴を求めたナと思ひ「中山氏〜」、「ハ」、「拙者娘の扱帯は本場の緋鹿子、質屋で二朱しか附けぬ、ドウも質屋といふものは不埒……」、「イヤ、面目次第も御座らぬ」、「其麼ことは決して御心配無用、今日御宅へ上つたのは御懇意初め、一獻差上げたい考へで御用が無くば近傍の料理店まで御同道下さるまいかな」、「是れは辱けな

いが、囊中誠に以て淋しい、其の中に軍用金調達いたして、手前より罷出ること仕る、今日は御免を蒙むる」、「否々、必ず尊公に御迷惑は掛けぬ、ドウゾ御附合ひ下さるやう」、「然らば御同道を致さう」。

躑躅帯締め直して、傍らに在つた關孫六三本杉兼元の例の赤鞘の大小を落差にして、堀部彌兵衛金丸に連れられて、四五町ほど來ると、ちよつとした料理屋があつた、「中山氏、此の家はナ折りに觸れては旨い物を食はせるが、ドウも器が汚なくていけない、此先さへ參らう」、「左様」又た二三町來ると料理屋がある、其の前へ來た、「ドウも此の家は亭主が佛頂面でナ、出て來る女中共までが自然と無愛想だ、面白くなくていかぬ、此先の茶屋へ參らう」と色難癖を附けて、話をしながらやつて來る内に、いつか築地の青物町淺野内匠頭様御上屋敷御通用門の此方、「中山氏、トウ〜手前旦那の御通用門まで

参つたが、寧ろ拙宅で一獻差上げたい」「ハ、ア、それは誠に結構、頂戴を仕
 らう。初手から自分の家へと言へば向ふが來なからうと、近所で一口飲うと
 偽つて引張り出したので、彌兵衛の計畧に罹つたとは少とも心付かないで結
 構だと言つた、ズーツと御通用門を通つて自分の住居へ「サア、どうぞ御構ひ
 なく御上りを願ひたい」
 案内を致しました奥まりましたる一間、苦勞をした人の住居だけあつて、ナ
 カ／＼至れり盡せりで、座敷廻りの容子から飾付け、左して贅澤を盡したと
 云ふでも無く、殊更に飾付けをしたと云ふ譯ではないが、誠に結構、「是れは
 ドウも結構な御住居で、第一御庭が誠に好しう御座る」世辭ななどを言つた
 事のない中山安兵衛先生、今日に限つて結構づくめのお世辭で持ち限つた。
 豫て吩咐であつたから、それへ持運んで來る酒肴「中山氏、何も御座らぬド

ウツ御氣根に御飲を願ひたい、拙者御毒味」其の内に、切口に水が泌みて來
 たから、安兵衛例の豪傑肌の人だ「ヤ、色々御款待を頂いて洵に辱けない
 拙者御馳走を頂戴いたすなら、小さな物は何ンだから、寧ろ大きな物を拜借
 いたさう」盃洗の水をわけて其れへ注ぐ、一銚子ちやア足りない「コレ／＼
 早く持つて來い銚子を……、小さな物で燂をして居ちやア追ッ付かんから、
 大釜で燂をしてドシ／＼此度へ手桶か荷桶で運んで來なさい」まさか其れは
 どではないけれど……、「イヤ、頂戴を致す」と、ガブ／＼ガブ／＼……
 思ひの外の酩酊に「今日は意外に頂戴いたした、ドウツ是れで御納盃……」
 「否、モウ此の上飲がらぬかな」「エー、何れ復た近日改めて御禮に罷出る、
 今日では是れで御免……」「ア、左様、然らばちよツと御待を願ひたい」「ハイ、
 何か此上頂戴を……」安兵衛ナカ／＼慾張つて居る「否々、差上げるのでは

ないが、少々御待ち……サアお志保、是れへ……」「ハイ」と應への聲と共に傍らの襖を開けて立出でたのは、御娘子お順殿の手を引いて先きに立つたお志保殿、最と華やかに化粧を致して、振袖に板締の帯、それへ両手を支へ「中山氏、牛込高田の馬場で御身、伯父上の仇討を遊ばすときに、扱帯を御貸し申した是れや愚妻、御言葉を願ひたい」「イヤ、是れは奥方で御座つたか、其節は誠に大切な品を御用達を頂いて千萬辱けなう存する、彼の節早速御返濟いたすべきであつたが、混雑の折柄、御姿を見失ひ、心ならずも歸宅を致した、殊には大事の場合、少と轉倒いたし御姓名も仰せられたが失念いたした今日御當家へ罷越さうとは夢更ら知らず、斯様な御款待に預つて、イヤハヤ汗顔の至り、何れ近日持參を仕る……、是れはく御息女、イヤ御美しく、彼の時拜借の御腰帯は御息女のであつたとのこと、安兵衛有難く存する」「コ

レ順」「ハイ」「婿殿が御言葉を下さる、何故其方はボンヤリ致して居るか、御挨拶を申さねばいかね……、イヤもう不束者でナ……ドウぞ幾久しう玉椿の八千代まで何分共に願ひたい」「何に婿殿、婿殿とはソレヤ何を……」「是れなる娘順の其許は花婿……」「コレヤ怪しからぬ事を承まはる、拙者は未だ當家御息女の婿となつた覺えは……」「お忘れあつたか中山氏、過日高田の馬場に於て復讐の際、愚妻が御贈り申した扱帯は即ち結納の印、其節御受納になつた上は、此の縁談は疾くに御承知の筈、唯今酌んだ酒宴は是れや内祝言不束者であるけれども、御見捨てなく、之れに依つて堀部の家は萬代不易、目出度く千秋萬歳と謠ひ納めやら、高砂や——此の浦船に帆を揚げて……」
 「斯様な事と知つたなら拙者罷越すではなかつたもの……、拙者少々他に望みも御座れば、左様なことを仰せられては甚だ迷惑、平に御免を……」

「何ンと言はッしやるか、然らば御承知下さつた縁談は唯今に至つて破談に致さるゝは、拙者娘順が不束ゆゑの破談と存する、是れも餘儀ないこと、コレ順、其方が思ひ定めた夫、親が許した縁組、今更ら夫に見捨てられて其方生甲斐があるか、あるまいノ、覺悟いたせ」「ハイ」のハイと返詞の下に、豫て帯の間に隠して置いた懐劍ギラリツと抜いて、振袖で半ばグル〜と巻くが早い、咽喉へ突立てやうと致しますのを、安兵衛其手を抑へ「コレ、何をなさる御娘子」「否、御留め下さるな中山氏、二世と契り生涯夫と定めた其の人に見捨てられて、自害を致すはコレヤ當然のこと、其れが叶はずば、此の場に於て妻も相果ると申すのだ、然らなれば斯く申す彌兵衛金丸も、老先き短い身の上、生存へて何か致さう、切腹して相果る、どうぞ御捨置を：御留立御無用に：」と「エッ」と流石の豪傑安兵衛鬼武庸も面喰つた。

第二十二回

是れは一場の狂言に過ぎないとは思つたが、赤誠置て自分を懇望する親子三人の容子を見て、ア、宜しい、武士は己を知る者のために命を捨てるといふ事がある、斯程までに思つて呉れるは辱けない、是れやア此人の言ふに任せやうと心が動きました。

中山安兵衛と云ふ人は大體感情の強い人だから、堀部親子が赤誠に動かされ「是れは恐入つた、江戸市中に評判の飲んだくれ安兵衛、グツ安などとあれも無い縛名を附けられた拙者を、斯くまで御懇望下さるゝは辱けない、拙者の妻女、承知いたした、併し人倫第一の大禮、今日といふ譯には参らぬ、何れ近日改めて頂戴に罷出でます、暫時それまで御猶豫を願ひたい」「イヤ、

其儀は承知いたした、誠に早速の御承諾、千萬辱けなう存ずる」何れ近日のこと、今日は是れにて御免」と安兵衛這々の體で堀部親子に別れて、靈岸島へ歸つて來たが、大醉を致して居るから、其の晩は何にも知らずに蒲團を被つてグ——ツと一睡。

不圖目を覺まして何時だらうと蒲團の中から顔を出すとサア大變、枕元でガタ／＼して居るのは、文金の高島田、振袖姿の堀部の娘お順、供の男が二人附いて來て、頻りに竈の下を煙さうな顔でお順が焚付けて居る、仲間が味噌を摺つて、若黨が水汲をする光景「イヤ、是れはドウも恐入つた、其の様なことを致されては……どうぞ其の儘……」お目覺めに御座りますか、炊事の業は女の役、百年の苦樂を夫と俱に致しますのは當然、斯様のことは一向差支へ御座りませぬ、何卒御捨置きを願ひたう存じます」然うでもわらうが：

…イヤどうも其れでは甚だ閉口いたす」起上つた安兵衛恐縮して、漸くのこと若黨に譯を言つて其の日は歸つて貰つた、すると其の翌日も又た其通り、其の翌日も復たやつて來る、流石の中山安兵衛も往生して、斯まで親切にして呉れるからは、致方が無い、黄道吉辰を選んで、目出度く堀部の家へ婿に往くことになつた、こぬか／＼と人に三たび招かれても婿養子に往くなといふ諺はあるが、女は人に愛せられる爲めに飾るといふ譬で、とう／＼是れが堀部の家の婿、名前も更へず其の儘、堀部安兵衛武庸。

斯うなると彌兵衛は鼻が高いから、早速殿様へ言上いたして、家中の誰彼にも右の話をして、日を選んで親子の披露の祝宴、家中の人々は皆な羨まない者は無い、一同酒宴の席に列なつて、目出度く披露を畢つた。

御主君内匠頭長矩殿は、性來武道を好ませ給ひ、此頃世上で噂さの高い牛込

高田の馬場で、伯父の仇討を致し、適れ武名を轟かした中山安兵衛と云ふ者が、御寵臣の彌兵衛金丸の養子になつたと云ふことを御聞きになつて、大層御喜悅「改めて會はう」と云ふ御意、霜月十五日の式日、内匠頭殿主従三世の盃を賜はるといふことになりませす。當日は吉田忠左衛門兼亮、熨斗目麻社杯を着用いたして、殿様へ安兵衛をお紹介せする事になります。書院の正面に御褥を御設けになつて御主君内匠頭長矩殿御着座、堀部安兵衛武庸は忠左衛門に伴はれて罷出で、御前に平伏して「恐れながら今日は麗はしきを拜し恭悅至極に存じ奉つります、堀部彌兵衛養子安兵衛、御目通りに罷出でまして御座います、何卒主従御固めの御盃賜はりますれば有難く存じ奉つります」
 「ウム、苦しうない、安兵衛とやら面を擧げ」
 「ハ、……、恐るく首を擧げるのを御覽せられて「これや安兵衛、其方は高田の馬場に於て伯父の

仇討を致し、浪人劍士十有餘名の者を手に掛け、適れなる劔を致したる由豫々承まはり及んで武も未だ地に墮ちざるを喜び居つた、然るに縁あつて堀部の家名を相續いたす段、其方如き勇士を臣下に得て長矩満足に思ふぞ、長く予に仕へて呉れよ」「ハ、……、身に餘りたる御懇命を賜はり、有難く存じ奉つります、不思議なる御縁にて御當家御家臣堀部彌兵衛養子と相成り、御家に仕へ奉つる上は、不束者には御座れども、御目掛け下し置かれますやう、犬馬の勞は吝ならず仕りまする」「誰ある、安兵衛に盃を取らせる、用意のもの是れへ……」「ハッ」と應へて昵近の臣、取出す處の御酒御肴、御盃を擧げたまひて一ト口召上つた、其の御盃を其儘、「主従三世の固めであるぞ」と仰せになつて下し置かれる、有難く武庸頂戴をして御返盃申上げる、三世の御固めの御式右の如くに相濟んだ後、御夫婦御揃ひで御酒を下し置かれる

「安兵衛、其方は豫て大酒と聞及ぶ、今日は氣根に過せ」、「頂戴を仕ります」
 銀の組盃を以て下される、組盃と云ふのは正月から十二月まで正月は
 一合、二月は二合と順になつて十二月は一升二合入る、一年を飲み乾すと七
 升八合飲まなければならぬ、如何な大酒の人でも是れだけ飲むと云ふのは
 稀だ、安兵衛其れを頂戴した、「其方はナカ〜豪酒であるノ……忠左衛門、
 安兵衛に今一獻遣はせ……聞と申せ」、「有難く頂戴を仕ります」聞まで
 飲んだ、「ウイ……エーイ」、「其方如き豪者を予が臣下の列に加へたは喜ばし
 い、一手舞へ」、「恐入りました、武骨の武庸、舞などの嗜は御座りませぬが、
 御所望ゆる據る無く、拙きことながら御免を蒙ります」と懸て扇面を執る
 と立上つて、踏跟く足を踏み締めながら「是れは唐土金金山の麓楊子が里に
 住ひなす……」と謠ひつ舞ひつ致します有様、長矩公いよ〜感心あそば

し、大層御喜びになります、舞ひ納めて扇面を前に、ヒタリツと其れへ着座
 をして、「未熟なる舞の一手、恐入り奉ります」、「否、嗜の程美事であるぞ、
 今一獻」と又下さる、「頂戴を……」と御盃を浪々受けて半ば乾して前に置い
 て「ウ……エーイ……」其の儘下打俯くと、何時か安兵衛グーツ〜と眠つ
 て了つた「安兵衛〜」と傍らに居りました忠左衛門が驚いて起さうとする
 と「ア、捨置け〜、起すには及ばぬ」ツカ〜と側らに進んで、安兵衛の
 容子をシゲ〜眺めて御居でになりましたが「コレヤ安兵衛〜ハ、ア好ら
 眠つたナ」着しておはしたる羽織を脱いで、フーワリ上に御掛けになり、「一
 同参れよ」と仰しやつて、其の儘ズーツと奥へ御入りになり、安兵衛は前後
 不覺に正體なくグーツ〜と、雷の如き鼾聲。
 少時経つて次の間まで御立出になりました長矩侯、襖を開けて透して御覽に

なるとまだ熟く眠つてゐる容子だ、御持添へになりました刀の柄前に手を掛ける時、鯉口を寛げてパチツと鏗音をさした時に、ハツと目覚めた安兵衛武庸、四邊に目を配つてヒタリツと身固めをした態度を見て、ウン、英雄能く酒を好むといふが、實に彌兵衛金丸は良い婿を得た彼は幸福者だと、御喜びになつて其の儘御引取りになつた、安兵衛武庸左右を見廻して「ハア、是れやア最前御酒を頂戴いたした一間だナ、前後不覺に熟睡を致して飛んだ粗忽を致したワイ」見ると、丸に鷹の羽打違へ御定紋の附いてる黒縮緬の丸羽織が自分に被つてゐる「ハ、ア、不覺の無禮を御咎めも無く、酔うて居るもの風邪でも引いてはならぬと御被け下し置かれた殿の御仁心、ア——恐入つたものだ、有難い、假令小身であらうと、陪臣で生涯暮さうとも、斯る御仁心の君を持つたるは我が幸福、此の主君の御爲めには一命を擲つて御奉公を致

さねばならぬ」と此に武庸、内匠頭殿の御仁心を深く感じ入りました。されば主従の盟ひを立てまして僅かに十年を出でざる内に主家の大變、鐵の如き武庸は忽ち大石内藏之助に同意して同盟に加はり、元祿十四年十二月十四日吉良家へ討入の節は抜群の働きをなして、後ち公の法に死して美名を今日に残しました、誠に武士の典型とも云ふべきで御座います。

演者曰す、今回は是れに止め置きまして、淺野家に仕へて、後年天下に武名を轟かす四十七士の一人、堀部安兵衛武庸の條は、改めて講演いたします。

新古今講談の粹を萃めたる
袖珍講談叢書

◎面白くつて爲めになる通俗教育の急先鋒！

小金井蘆洲師口演 (二冊讀切)

第一編 堀部安兵衛

一 龍齋貞山師口演 (二冊讀切)

第二編 寬曾我物語

◎第三編以下毎月續刊

クロース表紙
ボケット形美装
正價 参拾錢
送費 四錢

クロース表紙
ボケット形美装
正價 参拾錢
送費 四錢

◎汽車中電車中に於ける唯一無二の好讀物！

一讀三斗の溜飲を下ぐべく、再讀懦夫をして志を立てしむべき！

「壯快絶奇の偉人逸話！」

伊藤先生著
痴遊

快傑傳

クロース金字人
箱入美本全一册
正價 壹圓
送費 八錢

乞ふ見よ本書の内容如何の如く津々味をかきたる

- (1) 怪頭山満
- (2) 桂小五郎 (末戸幸允の壯年時代)
- (3) 板垣死すとも自由は死せ
- (4) 磯多正入大江卓
- (5) 五星人亨 (二只亭と自由堂)
- (6) 五星人亨 (三新編入獄事情)
- (7) 政経院院荒川高俊 (公明の始起)
- (8) 崎兆民先生
- (9) 中井櫻洲と中江兆民
- (10) 中井櫻洲と大久保利通
- (11) 木戸孝允と板垣退助
- (12) 坂本龍馬の遭難
- (13) 近藤重藏と大鹽平八郎
- (14) 池田の端地源一郎
- (15) 不遇赤井景韶
- (16) 坂本龍馬の文次大崩子
- (17) 陸奥宗光と小村海太郎
- (18) 澁澤榮次郎 (昔の澁澤榮二)
- (19) 中園引返し

以上

士博學文

訂校生先伴露田幸

第一卷	曲亭馬琴著	○	椿說弓張月	上編	(既刊)
第二卷	湖南文山編	○	○	第一	(既刊)
第三卷	曲亭馬琴著	○	椿說弓張月	中編	(既刊)
第四卷	十返舎一九著	○	○	前編	(既刊)
第五卷	著者不詳	○	○	第一	(既刊)
第六卷	湖南文山編	○	○	第二	(既刊)
第七卷	近松門左衛門著	○	○	第二	(既刊)
第八卷	曲亭馬琴著	○	○	下編	(既刊)
第九卷	著者不詳	○	○	第二	(既刊)
第十卷	十返舎一九著	○	○	後編	(既刊)
第十一卷	湖南文山編	○	○	第三	(既刊)
第十二卷	井原西鶴著	○	○	第一	(既刊)
第十三卷	著者不詳	○	○	第三	(既刊)

誰れが讀面白き日本の代表的傑作全集

四

寸三横・寸五 美堅幀裝・正嚴訂校
外内頁百三 册 毎

士博學文

訂校生先伴露田幸

第十四卷	曲亭馬琴著	○	○	客傳	上編	(既刊)
第十五卷	江島其磧著	○	○	其積佳作集	合卷	(既刊)
第十六卷	湖南文山編	○	○	○	第四	(既刊)
第十七卷	著者不詳	○	○	○	第四	(既刊)
第十八卷	著者不詳	○	○	○	全	(既刊)
第十九卷	曲亭馬琴著	○	○	○	中編	(既刊)
第二十卷	式亭三馬著	○	○	○	全	(既刊)
第二十一卷	湖南文山編	○	○	○	第五	(既刊)
第二十二卷	曲亭馬琴著	○	○	○	下編	(既刊)
第二十三卷	式亭三馬著	○	○	○	全	(既刊)
第二十四卷	著者不詳	○	○	○	第五	(既刊)
第二十五卷	湖南文山編	○	○	○	第六	(既刊)

▲第二十六卷以下原稿整理中 續々刊行

日本文藝叢書 正集百卷 續集百卷 既刊目錄

五

錢五卅製特・錢五廿價正
(錢四册各費送)

伊藤痴遊先生著

長谷場衆議院下序。福本日南先生序

(肖像、遺墨數葉挿入)

賜天覽
蒙台覽

西郷南洲

西郷南洲翁が少時に於ける艱酸より、惜い哉蓋世の偉材を遂に城山に埋むる迄、趣味深き小説體を以て詳細に活寫し實に身親しく當時の大活劇を目睹するに異ならず。翁が崇篤なる大人格は幾歳の後尙ほ人をして奮起せしめずば已まざらむとす。眞に空前の大立志傳(總振かな付)

陸奥宗光

大判三百七拾頁 洋裝體裁瀟酒
正價 九拾五錢 送費八錢

加藤先生序
日清戰役當時の名外相として「かみそり大臣」の名、洋の東西に高く、俊烈慧敏の才、克く故伊藤公をして畏懼せしめたる、偉傑陸奥宗光伯の光彩陸離たる奇生涯を精叙して、野開あり、奇談あり、明治政界裏面の素破抜きあり、忽ち紙鳴り、筆躍る、而かも故伯が壯時千、忽ちにして怒濤澎湃、忽ちにして天地晦冥、眞に到つては、誰れか憤を發して食を忘れざらむや。當に是れ天下一品の偉人傳(總振かな付)

東亞堂發行傳記書類

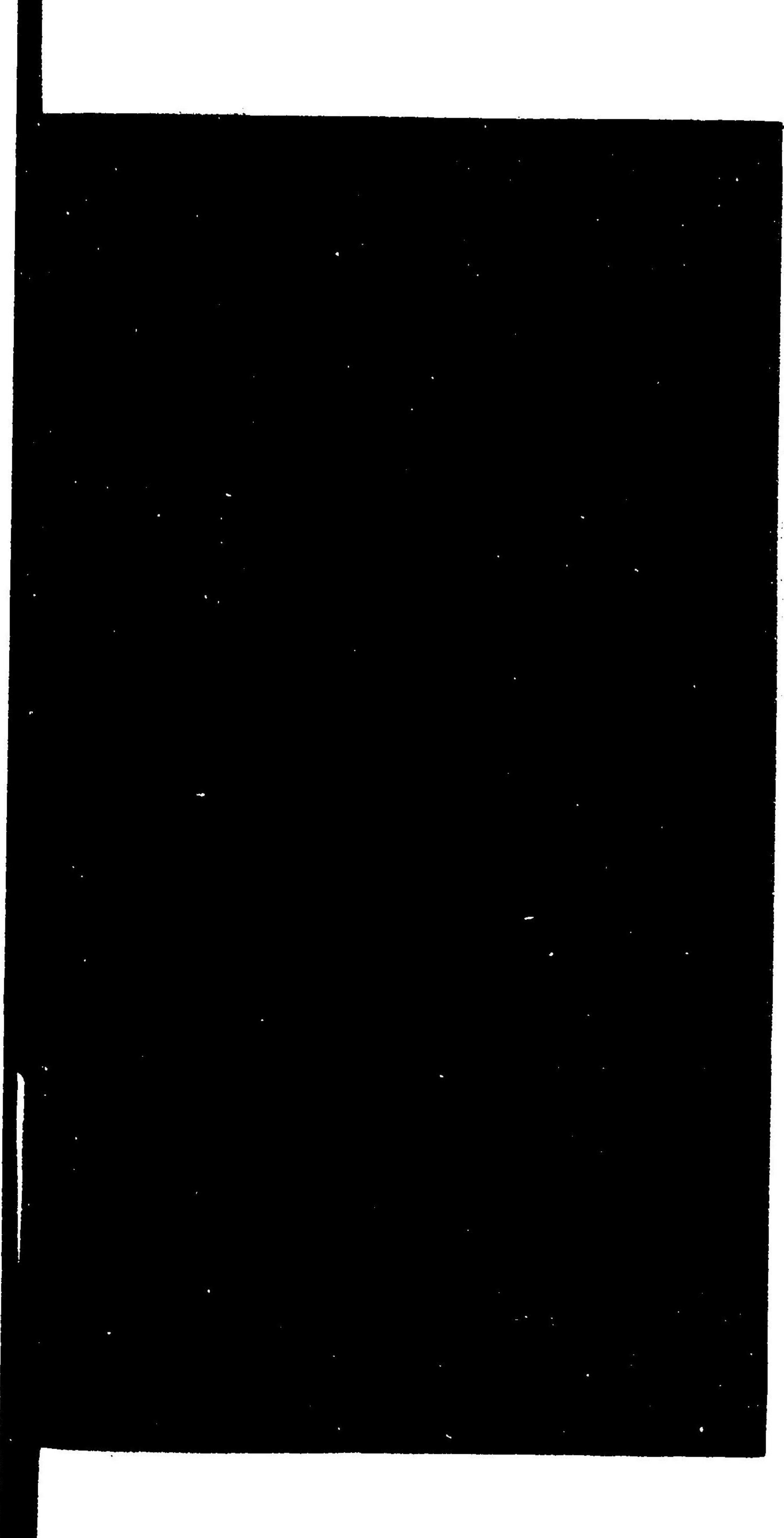
堀内新泉先生著	足立栗園先生著	德富蘇峯先生序 鹽見戈山先生編	破産禪居士著	伊藤痴遊先生著	山路愛山先生著	藤田長江先生編	白田石楠先生編
○立志 小説全力の人	○古英雄の生活觀	○修養 逸話偉人の風化	○偉人修養史	○巨星 亨	○勝海舟	○福澤翁言行錄	○西郷南洲言行錄
全二册 入拾口	全一册 裝洋美	全一册 裝洋美	全一册 裝洋美	全一册 中稿起	全一册 裝洋美	全一册 裝洋美	全一册 裝洋美
送正價 費拾貳錢	送正價 費拾四錢	送正價 費拾六錢	送正價 費拾八錢	送正價 費未定	送正價 費九拾錢	送正價 費拾四錢	送正價 費拾六錢

東亞堂發行傳記書類

文學博士 幸田露伴先生著	文學士 幸田成友先生著	昆尼薩台殿師校閱 青山霞村先生著	沼波文學士校湖 宮垣四海庵先生著	文學士 白河鯉洋先生著	報知新聞記者 熊田草城先生著	福本日南先生著
○賴朝	○大鹽平八郎	○深草の元政	○俳味禪味 <small>(芭蕉傳)</small>	○孔子	○ <small>天覽</small> 少年武士道 <small>第二</small>	○直江山城守
冊一全	冊一全	冊一全	冊一全	冊一全	冊二全	冊一全
雅優頗	本美極	裝洋美	裝洋美	麗莊頗	入繪口	裝美極
送正價壹圓八拾錢	送正價壹圓五拾錢	送正價七拾錢	送正價四拾錢	送正價壹圓貳拾錢	送正價各四拾錢	送正價壹圓貳拾錢
					送正價各六拾錢	送正價壹圓貳拾錢
						送正價壹圓五拾錢

266

310



097617-000-1

特63-701

堀部安兵衛

小金井 蘆洲/口演

M44

DBS-1550

